

〈ケア〉を考える会 (第106回)

■日時：2016年 **3月13日** (日) 13:30~17:30

■会場：京都市山科区安朱中溝町3-2
山科駅より東 徒歩3~4分の民家
(山添)(安朱保育園 東隣)

■当日の大まかな予定
13:00 → 有志集合…会場準備等
13:30~ → 学習会(読書会)
15:30頃~ → 懇親会(笑いヨガなども)
17:00~17:30 → 片付け、終了
(その後で、名残惜しコーヒータイム?)

■内容

(1) 学びの会(読書会)

鷲田清一『老いの空白』(岩波現代文庫、2015年刊)

「5 ホモ・パティエンス—べてるの家の試み」

(2) 懇親会……食べながら飲みながら語り合います(持ち込み歓迎)

※山添さんご夫妻の手料理は絶品です。美味しいこと請け合い

※懇親会参加者で実費(1000円程度)ご負担願います

★参加申し込み、問い合わせ、メーリングリスト登録希望

⇒ 林まで：884michiya@gmail.com

★どなたでも参加できます。初参加歓迎。飛び入り参加、突然参加もあります。

★読書会は、本を読んでいなくても遠慮なく参加できます。読んできてほしいけど……。



▼おたがいの言葉を手がかりに考える時間をもつこと、確かめながらゆっくりと考える時間を共にし、分け合う
「考え」でなく、「考え方」をお互い共有してゆく
結論はありません
プロセスをゆたかに

(長田弘『なつかしい時間』P.191)

「老いの空白」ノート ④「弱さ」に従う自由より

▼老人が老人として大人の世界から退場してゆくのではなく、〈老い〉の時期としての時間に重要な意味を見だしながら生きてゆける社会、それが社会の成熟と言うものではないか(93頁) ▼何か物品や価値を生産するからではなく、「ただいる」ということだけでひとの存在には意味があるということがあたりまえのこととなったときに、はじめてひとは「成熟した社会」のイメージ、あるいは〈老い〉の文化というものに、リアルにふれることになるのだろう。(95頁)

▼「世話をする—世話をされる」という一方通行の関係を超越するような地平のなかにじぶんを放り込もう(102頁) ▼相互に依存しないでは何ひとつできない、そういう人間の〈弱さ〉が、この社会でどれほど見えにくくなっているか(……)相互依存(interdependence)、それはあまりにあたりまえすぎる事実だと言ってよい。(110頁) ▼扶養する者—扶養される者、介護する者—介護される者、保護する者—保護される者というかたちで、家庭や福祉施設や学校を一方的な管理のシステムとして再編成し、「弱者」を管理されるものという受動的な存在だと押し込めることになった。女性も老人も子どもも、その対抗性、破壊性を封印され、「可愛い」存在であることでしか安寧をよく約束されないという体制が社会に浸透していった。そうなりたくなければ「がんばれ」、というわけだ。(112頁)

▼支える—支えられるという関係はつねに反転する。(……)依存はつねに相互的である。(……)ケアがもっとも一方通行に見える「二十四時間要介護」の場面でさえ、ケアはほんとうは双方向的である。子どもを育てるなかで赤ん坊の笑顔に救われない人はいないだろう。(114頁)

▼弱いものに従うこと、そこに「自由」がある(117頁)

ひととひととの関係において重要なのは、各人が主体的にどのようにしようとしているかではなく、いつとはなしにお互いが心を開いてしまっているという事態である。

(池上哲司『傍らにあること』P.169)

岩波現代文庫/社会279



老いの空白

鷲田清一

文字が
大きく
読みやすく
なりました!

岩波
現代文庫
創刊15年

〈老い〉は、
ほんとうに
「問題」なのか?

「〈ケア〉を考える会」ホームページ

<http://care-kyoto.jimdo.com/>

「〈ケア〉を考える会-岡山」

<http://okayama-care.jimdo.com/>